朝日 歌壇 俳壇

永田和宏選

いろいろとあるよねと言ういろいろを訊かず
四人は二度目の乾杯　（松阪市）こやまはつみ

野原で戦う若き兵士等に観客は無し声援も無し　（五所川原市）戸沢大二郎

ウクライナ七万ロシア十二万侵略なくばまだ在りし人　（観音寺市）篠原　俊則

この世には残業代と夜勤手当ありしこと知る教職やめて　（霧島市）秋野　三歩

老人の一部は戦後生れにて戦時の子より体格は良き　（相馬市）根岸　浩一

「波切とふ町にゐる」白い灯台と鷗の絵葉書が暮れてゐた　（京都市）森谷　弘志

献立を考えることもなくなりて料理番組観てもメモせず　（豊中市）夏秋　淳子

テレビ付きドア・ホンつけて人を待つ三日目カケス五日目タヌキ　（長野県）千葉　俊彦

正確に言えばこうなる「トリチウム微量残留汚染処理水」　（朝霞市）岩部　博道

髪切ったことに気付かぬ夫ならば毒盛られてもきっと気付かぬ　（戸田市）蜂巣　幸彦

【評】こやまさん、お互いにいろいろあるが、それを聞かないのが旧友というもの。「二度目の乾杯」がいい。戸沢さん、ラグビーなどの大きな声援に比し、誰も見ていない場での兵士らの凄惨な戦い。篠原さん、わずか一年半でこれだけの死者が。

馬場あき子選

☆「わっ」と言う訪問先のお客様私の肩に大きなバッタ　（富山市）松田　梨子

アマエビやメギス市場にお目見えす底引き網漁解禁の秋　（石川県）瀧上　裕幸

骨折の祖母に頼まれ水まけば一斉に庭のカエル飛び出す　（富山市）松田　わこ

きび砂糖の甘味の底の沖縄の悲しみ思い大さじ二杯　（福島市）美原　凍子

名寄岩・照国もいたり海軍の松根掘りし庄内の山　（柏市）秋葉　徳雄

種籾の不足と聞きし酒米の割り振りを待つコロナ禍終へて　（長野市）原田　浩生

踊り手の声無きおわら風の盆胡弓の調べ闇にしみ入る　（大和市）水口　伸生

右足を出したら次は左足シミュレーションする初松葉杖　（東京都）阪本　俊子

山畑に行くが楽しみ木障に生る通草が一つ二つと挽げて　（所沢市）若山　巌

☆ブーメランみたいに平たい海ガメの赤ちゃんの手はつばさの形　（奈良市）山添　聡介

【評】第一首はお得意先廻りの時か。いつしか肩に止まっていた大きなバッタを見つけたお客様の驚きが面白い。第二首のメギスはニギス科の海水魚。いよいよ秋の漁期である。第五首、戦中お相撲さんも松根油採取に使役された。

佐佐木幸綱選

勢ひよく籾摺機より出でし米袋に入れてわが名を記す　（匝瑳市）椎名　昭雄

頑張れと阪神応援するよりも自分の仕事頑張れと妻　（海南市）樋口　勉

天候に左右をされる職人で混み合う雨のパチンコ店内　（浜松市）久野　茂樹

山あいを走る列車はファスナーを閉じゆくように駅をめざせり　（大阪市）多治川紀子

炎天にすかすか白き時刻表岬のバスは一日二本　（福岡市）藤掛　博子

夕陽浴び影絵のごとき山を背に大極殿は朱く浮上す　（大和郡山市）こたにひかる

この国は炎暑がトップニュースなり七十八年戦なき国　（東京都）上田　国博

芋虫は柚子の葉色に脱皮して柚子の葉を食む頭振りつつ　（仙台市）武藤　敏子

ムササビが昔、鎮守の森にいたことばかり言う若い宮司が　（枚方市）久保　哲也

☆かけ声は「1、2の、さんごしょう」だった水族館の記念撮影　（奈良市）山添　葵

【評】第一首、新米を出荷する緊張感をさりげなく表現して、結句うまい。第二首、作歌時は阪神の優勝がまだ見えていない時だった。第三首、混雑する雨の日のパチンコ店独特の空気。第四首、山あいを走る列車を大きく遠景で捉えて印象的。

高野公彦選

登り来て山頂はまだ見えねども生きて来た日々広がる下界　（筑紫野市）桂　仁徳

モノクロで見るものだった戦争が4Kとなり今起きている　（横浜市）菅谷　彩香

名を覚え難きわたしがプリゴジン、プーチン、ゼレンスキーは言へる　（坂戸市）納谷香代子

早朝の犬の散歩の時すでに人影見ゆる職員室は　（大分市）岡　義一

処理水の海への放出始まれば原発の可否あらためて問はむ　（鎌倉市）石川　洋一

☆「わっ」と言う訪問先のお客様私の肩に大きなバッタ　（富山市）松田　梨子

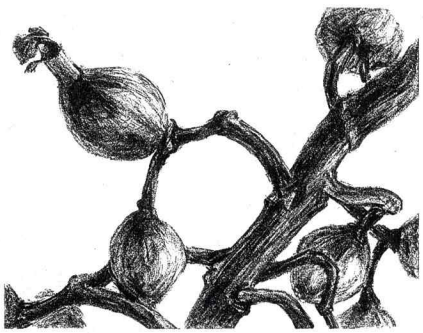
母からの電話はああで始まってありがとうありがとうで終わる　（綾瀬市）小室　安弘

☆かけ声は「1、2の、さんごしょう」だった水族館の記念撮影　（奈良市）山添　葵

おばあちゃんボケとツッコミ足りひんよ十歳の児は声高に言ふ　（舞鶴市）新谷　洋子

☆ブーメランみたいに平たい海ガメの赤ちゃんの手はつばさの形　（奈良市）山添　聡介

【評】一首目、下界の風景を見て今日までの人生を想起したのが新鮮。二首目、モノクロでしか見たことがない戦争を、鮮やかな4Kの映像で見ることの悲哀。三首目、連日の報道でいつのまにか難しい人名を覚えてしまったことが悲しい。



〈ゲットウⅠ〉　日高理恵子

うたをよむ　先の見えない不安

梅内　美華子

先の見えない生の不安を若い世代はどのように詠んでいるだろうか。

才能というギャンブルにくずおれた家族が回すビーチパラソル　川口慈子

川口慈子の第二歌集『Heel』より。家族が一丸となり夢に向かって邁進したが競争から降りることになった。夢を諦め醒めた時、「ギャンブル」のような危うさを持つものだったと総括される。敗北感に続くビーチパラソルの奇妙な明るさには解放感と安寧がないまぜとなっている。このような家族の物語は現代に少なくないが、ビーチパラソルが愛の在処を映し出す。

転生をはかるがごとく故障した指で再び弾くベートーヴェン　同

作者はピアニスト。困難に立ち向かうにはベートーヴェンがふさわしい。生き続けるための強さを模索する姿がある。

濱松哲朗の第一歌集『翅ある人の音楽』は多彩な修辞で力量を感じさせる。

後ろから押されても一人耐へてゐる最大多数の最大幸福　濱松哲朗

開かるる門のかたちにあふれ出づる饗宴の灯をしばし見留む　同

多数の力や幸福のモデルが信じられていた時代は過ぎた。「最大」には、驚異や称賛が含まれるが作者には脅威であり、小さな声による訴えがある。二首目は「饗宴の灯」の描写が美しい。その豊かさは自分から程遠いという。『聖書』のルカ伝に説かれる「富める人」と貧しい「ラザロ」を元に思索した歌であり、主体の疎外感や孤独感と重なり合う。

30代の彼らは言葉を研ぎながら人間性の保持を希求して詠んでいる。（歌人）

風信

恩田侑布子著「星を見る人」　評論集で副題は「日本語、どん底からの反転」。石牟礼道子、飯田蛇笏ら表現者の風合いある表現を取り上げた。（春秋社・2640円）

黒田杏子句集「八月」　3月13日に死去した俳人の最終句集。391句を収録。「花巡るいつぽんの杖ある限り」「狐火の紅蓮終生まなうらに」（角川書店・2970円）

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のはがき1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に**住所、氏名、電話番号を明記**。〒104・8661　晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があります。